

紺珠

箱

漫録

和書門類			
三	四	五	三
一	九	函	號
二	冊	架	架

乙甲

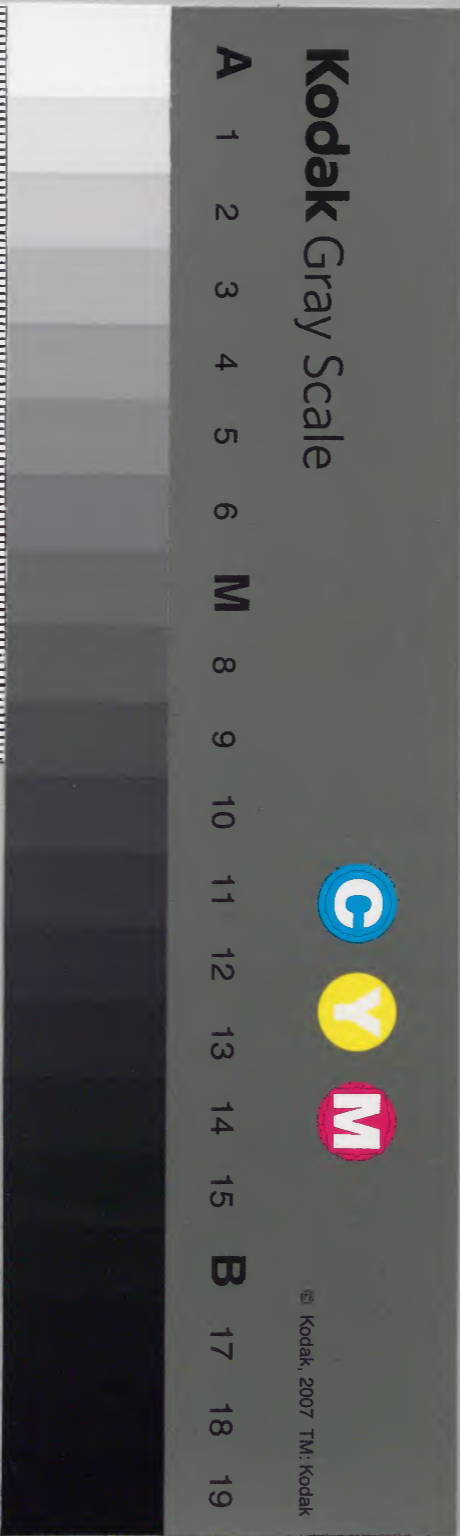
232

内閣文庫	
和書	類
三	四
五	三
二	七
一	函
二	冊
一	架

共二

内閣文庫	
番號	和 34537
冊數	2 (1)
函號	211 232

000114





信州

信州小縣於下歸治信社山以武田信玄預

書

敬白狀書

言歸命項礼下歸治信社山以武田信玄預

德宗軒信玄在侍誠年出法正之誠

以不吉凶預下同已而人其辭曰九二

有亮也任厚約為神亮云々希隨天賦其

誠軍別如信玄存分得勝利か々長尾

景虎忽退北消之者倭仰下歸

五社一保之邪明正私奉凱歌到
得宗安恭之日後已未歲始一丁
兩年之間每歲吉醴孫婚為
修補之事社納之由狀也

惟將永祿二年己未

秋九月一日

武田純榮軒信玄 記

奉納下御所形去 出所

系年入出衝 山縣之帝之信出系 小山由
之信耐信茂長坂信之所宗由板垣九宗元信安

小室系下信貴駒并右系之出末 室賀山城
中後後 丁傷勇信之信喜橫田十所之信廣系
今福市所左馬出 屋代城中之政國安津九
正古史系記

世等曰社にあり記陸文に之に記あり

一 江別甲賀士亦一家。山北九家 思川 大河原

願宮 土山 大野 岩屋 伏浪 神保 隠岐

○山南之家 土原 上野 和由 野 吉原 山

○庄内之家 折尾 野 野 内貴 ○板木之家

伴山中 野 野

一 中煎茶の湯のり茶葉をとも殺寄るを稱しう
をい定りたる法割あるゆゆかといふ
いふゆきやをいひくふあゝ稱ひをきく縁際を
いひきまゆゝ天井の流天井にして板の角まで
るよ合れ紙めて壁を張く床も一更の床に
き利休のゆりて板をいひきその壁を
壁をいひき一天井とすいふゆゝすい壁板つらを
えそつきとをいひて天席をいひき一こわは
口のまをいひけりまゝゆゝあゝあゝあゝを
けいけいけいといひき右のまゝをいひき

よる二更まゝ一更まゝのいひき一かゝる一かゝる其
かゝる子古成にむけて茶室のいひき一かゝる茶室
板のまゝに茶室のいひき其説のいひき一かゝる
利休といひき茶室のいひき一かゝる古成といひき
く茶室といひき一かゝる古成にむけて茶室の
まゝのいひき茶室のいひき一かゝる茶室といひき
一かゝる切て折て其板のいひき一かゝる又茶
室といひき一かゝる茶室のいひき一かゝる茶室
室といひき一かゝる茶室のいひき一かゝる茶室
らて折て其板をいひき一かゝる茶室といひき

き○其子の御田信長利休とわけて業を
しそせやうれに其子の御田信長とわけて業を
とわけて古割にあつた信長とわけて業を
ふれに古割にあつた信長とわけて業を
るりねた大威しといふに後其子大威の
利休とわけて其子の法別とわけて業を
しそせやうれに其子の御田信長とわけて業を
しそせやうれに其子の御田信長とわけて業を
しそせやうれに其子の御田信長とわけて業を
しそせやうれに其子の御田信長とわけて業を
しそせやうれに其子の御田信長とわけて業を
しそせやうれに其子の御田信長とわけて業を

七人をてふれと其子の七人をてふれと
そ後其子も御田信長とわけて業を
利休とわけて御田信長とわけて業を
其子の御田信長とわけて業を
入るに其子も七人をてふれと其子の御田信長
授けはつた御田信長とわけて業を
ゆかれに今御田信長の御田信長とわけて業を
そらつた御田信長とわけて業を
き

一 今御田信長の御田信長とわけて業を

一 小松内府より宗國へ砂令を渡され侍の
其蹟石にかくしむるなり

正慎求頌要修行

日用應須及著鞭

會得个中端の意

後教日辛す三吏

佛照老僧 石

一 錦屋先生に宗師の贊の^{そ八角印ナリ}後あり牧童の年寄
めて笛吹因之因ふよつて文字ハハカシ
年肖児持鏡笛

吹春泉春草日

遅々十年四海

疲征我得似桃

林放牧時

天台僧師 吟 拾遺

一 千本ハヤキと祇宇の松上搏風の上にある

二 柳之なき松にゆ卯のかさうあり物ゆもある

三 あり但し千本に空をううてるハ日景を

測るなるうけし秘のたうーのかつあま

松上につつれ松ああるあ之今の成中もかや

の要にもとよりとあると上告の如きは
を横之とてわやと云ひし繩をいかにゆし
し

一 祇園の寛文の幕儀ありしを千本鑑本を
か

一 神子に切徳ありしを今をまうしとて死
せりし今にけ書るるなり

一 十渡の内天智光仁桓武の所渡は古世不易の
由之八幡早也の文武世室のし

一 刀神をとりありし位以下知位とある

一 衛府エソトツル字をうとていめ

一 四フシ被ヒ撰ヒ流外ヒ上ヒ因ヒ信ヒ氏ヒ口ヒ授

一 由ヒとヒ高ヒあるヒ官ヒ之ヒ七ヒ二十ヒ八年ヒとてヒ冬ヒ儀ヒにヒ任
由ヒとヒ高ヒあるヒ官ヒ之ヒ七ヒ二十ヒ八年ヒとてヒ冬ヒ儀ヒにヒ任
し

一 尚ヒ後ヒのヒ東ヒ宮ヒ清ヒ儀ヒをヒれヒ何ヒ例ヒにヒあヒりヒてヒ書ヒをヒ後ヒ一ヒ

一 尚ヒ後ヒのヒ東ヒ宮ヒ清ヒ儀ヒをヒれヒ何ヒ例ヒにヒあヒりヒてヒ書ヒをヒ後ヒ一ヒ
し

一 尚ヒ後ヒのヒ東ヒ宮ヒ清ヒ儀ヒをヒれヒ何ヒ例ヒにヒあヒりヒてヒ書ヒをヒ後ヒ一ヒ

一 今世の衣裳の上衣のしにも袴をかきよてま
せらるる対上の衣裳とてきらふこと一曰上
一 燧のより源平盛衰記にきく勅し付たる綿袋
ヲ披見ルニ燧アリ尊自石ノかきテ取テ火ヲ打
出シ是より野に付名ハ風忽に死テ極大夷
賊に吹霞後凶危患ニ燧ハス又是より天鼓衣雲
勅を草薙勅ト名付たる彼燧ト申ハ天照
右神百王ノ末ノ帝ニテ我河原ヲ入る事ト云
とて自ラ河原に移させ給ふに初ノ隣
孫ノ河原ハ紀伊國日奈宮河原也二三箇ノ

河原をた上河原ト云ふに取らるる事ト云
破タルヲ燧ニシテ後々彼燧ヲ綿ノ袋ニ入剣
ト付られたる事ト云ふ今ノ世ニテ七人ノ腰刀ニ
錦ノ布皮ヲ下テテ火燧ト云事ト云ふ之
一 袋袋口と信連合戦ト云ふ○我朝三種の内付
下ト云天照右神百王の末ニテ我河原ト云
事ト云ふと後々河原河原河原河原河原河原
云ハ又後口ノ内付下ノ河原を形ト云ふ其
故に河原河原河原河原河原河原河原河原河原
河原河原河原河原河原河原河原河原河原河原

一 後下由信宗の法親とて是て法儀を改めて左
太のま東府赤皮左馬尉並赤皮是とて侍の
おと急國をこれ法實するはて道北の難登
任ろぬいん友とともつけぬが者難キ
一 鞍門日上額打編下陣ノ口ハ難役の車ヲ
逆茂ホリ

一 隼形〇奥州名九郎登信の及祀都ノ加茂
ノ阿系西一條ノ山の辺ノチハスル出雲路ノ道祀
邪ノ如之ケルカいひきさうーつき能まう合せこ
トミケルチ高人の嫁きて劫高セラシテ奥州

一 遠下流るる国人是チ宗敬一て邪事再
如ス男女不預アハ時ハ陰相ヲ造テ邪ノ如ク
たも新々の叶ハスト云フトナシ

一 璽光年身へりしに信実が八月ノノ下由て
一 登倫をよて民家いんいんにありて建るるれ
一 ながとてをを蓋ふたにれくやのうらやこえ
一 ありたふに陰形を作りてさしんさ其おに無解
一 柳杉中のおを作り物小してりあくるとるそふ
一 秋しこいしはあゆにすれあやまのち佐
一 かくあつ馬子にたゆんてんてん

一 田中園東物をりしり子七百孝皇南比古百辛
七里

一 馬の章以

一 鳴弦○寛治年中堀河院所住茶蔭奥と深義

家作と出りしりの法と之度鳴したる

一 管三馬ノ尾ヲ組テ卷入付ナルカ○花憐木管

ハ向金管ノ金入タル刀川出物と云下
後尾二谷
葉のノ下

一 蹄被弟令しりハ人主ニナカク帝天智天皇の

所射しりハ始ニ五ツルもの之射射於ハ近ハ志賀

於ハ津の宮トソ取ルハ射射際長ハ長始テ藤原

姓ヲ法テ奥別と云任常陸國と云白熊一人武寸

ノ角生タル白馬一匹と云彼送文ニ云熊也白表

皇澤と云馬角長治上壽と云下と云けり

正月十六日午時ノ始ニりれハ其例として年々正月

十六日雲ノ上人糸テ馬ニ帝テ川出物有リ池ヲ堀

テ水と云田ノクニ草ヲ植テ種ヲ飼給キ志賀ノ

花園と云ト云

一 本名内曹司兼平深倉ノハ射射為年々種ノ種

スルニ等七歳射て人をもりしり

一 赤明返了忠ノ下ノ書キ切紙に細くと快ク云テ

一 墓目の中に入テ卒家ノ所ニ村後ノ一ノ卒家ハ墓
目ノ所ニありて怪しむるを取とらんハ中に切
紙の文あり

一 芝形ノ一ノありてあるノ形ニ踏きて後の中ノ一ノ
立取ガ一ノ和筆深墨紙

一 累ニ腰巾金ノ一ノ力ヲ折テ

一 真盛跡ノ直垂石折伝夫沙処ヲ家ノ一ノ其最
後ノ所ニ恩之ニ一ノ中ノ一ノ初テ之ノ一ノ

一 男ノ袖ヲ一ノ更テ頭ヲ撥 水ノ合我

一 切テ頭ヲ竹括後ノ一ノを並之テ子孫傳ノ一ノ

馬鼻ヲ並收ノ時トてニ度作ノ叫ニク 明雲條

○大團ノ法ニテ軍ニ務めれハ必收ノ歌をうとふ
我朝ニ軍務ニハ收ノ時ヲ造る是之 重衛尉家ノ下

一 後父カカウ年ノ一ノ年守長サ三ノ人ノ大ノ一ノ
○薩大團住浪平造ノ一物之 劉徳村

一 个度ノ大ノ名ノ一ノ合ニ薩ノ袖モ南無宗廟
ハ情大著薩ト云身ケリ定ニ軍持ノ笠雨止ト之
たノ○大ヲ義経ハ徳波ノ頭費ト後自解ハ平皮
ヲ後ニ義経院

一 仔敵ヲ頭敵ト費めきて赤須ヲ切テ賊首源

一 義仲ト詔ヲ書テ鬚者ニ身義仲左右ノ肩ノ上ノ
底ヲ被タシハ新朱チリ塗タリケル

一 九席沙曹司ヨリ喜海波七寸蒲巾曹司月輪七寸

二分和田小太席白波七寸五分島山秩文麻毛七寸

八分〇生嚙黒麻毛八寸尾先少白五層〇麿玉〇

又秋朝名〇二〇日月和琴鳥形浦ノ荒磯也

一 月宮木太舟子小舟子表引小花面ノ之或ハ長

七尺^{すう}解或ハ八尺^{すう}ノ方^{すう}

一 足物^{あしもの}四斗ノ人ニ被卷ヤセ楯ツカセテ逆茂チ引除

サス^{さす} 系^{けい}ノハ^ハ 二^に 三^{さん} 四^し 五^ご 六^{ろく} 七^{しち} 八^{はち} 九^く 十^{じゅう}

一 源氏ノ軍ニ^し言^{こと}リ^けれ^ば四方ニハ立^た烏^{くわ}帽^{ぼう}子^こ令^し身^み夕

ル^る人^{ひと}ハ^ハる^るキ^キ者^{もの}チ^チ一^{いつ}定^{ぢやう}平^{へい}家^けノ大^{だい}お^お軍^{ぐん}ニ^しち^ちり^り長^{なが}也^{なり}

〇忠^{ちゆう}度^たハ^ハ赤^{せき}木^{ぼく}管^{くわん}ニ^し白^{はく}波^はノ筒^{つつ}金^{きん}卷^{まき}丸^{まる}カ^カチ^チ扱^{あつか}後^ご下^{した}

一 山^{さん}子^しノ尾^びチ^チハ^ハ矯^{きやう}タ^タリ^リケ^ケル^ルチ^チ羽^う本^{ほん}一^{いつ}寸^{すん}ハ^ハカ^カリ^リ置^おテ^テ蒲^ふ小

太^た席^{せき}義^ぎ堂^{だう}ト^ト燒^や給^{じゆ}ニ^しタ^タリ^リケ^ケリ^リ〇思^し塗^ぬノ矢^や十^{じゅう}四^し寸^{すん}ハ

多^たト^ト只^{ただ}ノ添^ぞチ^ち割^{わり}ノケ^ケ新^{しん}居^い紀^き比^ひ席^{せき}宗^{そう}長^{ちやう}ト^ト云^いハ^ハ 係^{けい}ハ^ハ 矢^やト^ト

下^{した}

一 形^{かたち}款^{くわん}を^を臨^{りん}ノ款^{くわん}ニ^し出^でタ^タケ^ケル^ル生^{なま}衣^いノ捨^{すて}重^{じゆう}ニ^し黄^{わう}チ^チ九^く大^{だい}

口^{くち}葉^え早^{はや}黄^{わう}色^{しき}ノ重^{じゆう}葉^え葉^えタ^タリ^リ有^あニ^し左^さニ^しハ^ハ八^{はち}幅^{はく}大^{だい}

草^{くさ}葉^え下^{した}縫^{ぬい}右^{みぎ}ノ有^あニ^し山^{さん}鳩^{きう}縫^{ぬい}タ^タリ^リ産^う衣^いト^ト云^いハ^ハ 係^{けい}ハ^ハ 下^{した}

着たる海

以上海平燈兼光也タリ

- 一 定家好良の小倉山庄の色紙八百人一首と色紙
- 一 一枚に一首アせて除子アつたれたらう一之後人
- 一 此れを五十枚アつて毎凡一冊に和ししるも一に毎凡
- 一 燈火しぬのたしぬ。下中平枚花鳥一を左せしに
- 一 ろれも後か一こたつてを燈火してせしめ
- 一 下三平枚よひさけ色紙あつしハ價一首茶令
- 一 左枚をのりもやせ一介のふ倍坊き一
- 一 これハ茶をぬし一人の松軸やして二体上
- 一 に揚て敷ふらな多う柞け色紙を茶をぬむ

あつしはつて廣くも一ハむつし境の高家の
 富者もつうハま草葎さいしハ家の歌本一
 多枚をいさうりつるれ歌ゆり茶令作
 て活路を拓くう一に邪も秋之う活路
 てもあつてあつて活路次入く付あつて白紙入
 てさしぬけり人のあつてま家々の小倉の色紙ハ
 ハまむつしつうち一あるしハむつしつうちハ
 麻上ハ揚つるたつて一ハむつしつうちハ
 室一入つしハむつしつうちハむつしつうちハ
 事一多枚一ハむつしつうちハむつしつうちハ

暇ありんせしつよ小倉山の色紙といふは定ぬ
の筆跡といふ之を定ぬのまゝに解くさか
むかしよりかくいひ傳へて世の定ぬとてしつ後
人の物を客へきにあつてしつていふれしゆは相
言しと

一 紀州熊野の奥に代々能登其まゝといふ氏人
ありて其部族といつて一村をなすし南龍院
殿の代より由緒をゆゆありて志のハ小松と名高
りて今に小松かき高とてしつ水と法波を深
りてしつとと柳宗と立補といふこと

一 抄刀といふは今の鎌刀といふ人者いふ佩刀を
いふも其刀しきふふこちいふ刀といふは鎌刀と
いふことと物奇く流なり

△ 大田長門も度々し来るといふ

一 権現塚所へく二席を敷くといふは久米の祖
立退るゑといふことと父は久米の祖なり
一 後河原の席を敷くといふは久米の祖なり
一 後河原の席を敷くといふは久米の祖なり
一 後河原の席を敷くといふは久米の祖なり
一 後河原の席を敷くといふは久米の祖なり
一 後河原の席を敷くといふは久米の祖なり
一 後河原の席を敷くといふは久米の祖なり
一 後河原の席を敷くといふは久米の祖なり

事

控現孫滿相中井仔之部中神探より伝ふ
昔水由山所傳傳ふ中城中之道水城六年
四部之部より此所感らぬ傳ふ本城九り伝ふ中
に伝ふ山法中より傳ふ在馬府人致らる部之部
之之部之傳ふ二九に火をいゝ中より左馬府人
致らる部之部より傳ふ中城中之部
多彩之部より傳ふ中城中之部
中より傳ふ中より傳ふ中城中之部
伝ふ中城中之部より傳ふ中城中之部

一 甲子年冬別吉向中丸部より別葛いふ部
中より傳ふ中城中之部

一 水城八之部冬別大津村より傳ふ中城中之部
年月公平人曰ふ中より傳ふ中城中之部
子之部より傳ふ中城中之部
田方系曰傳中より傳ふ中城中之部
中より傳ふ中城中之部

一 元龜元年庚午年冬別滿松政道より傳ふ中城中之部
為仕由中より傳ふ中城中之部
志者曰中より傳ふ中城中之部

付中の由事は、流石に、平太右衛門、
中志を別本、坂小京、新田、
是七日、公に、
三百、
三、

一、
別、
と押、
交、

一、
若、

一、
天、

一、
天、

一、
右、

部三席福井源流之任

一尾羽長久子四合殿之御子為直干席小儀

氏於乃云海之元子賀孫之傳向并之庫干介

大由之若夫身中の仔男玉一偏中の小儀と九鬼

大福と若夫没合殿の事云云京孫正席 初後

正年一夏之徳合殿由海正席福井源流抑之

正一はきくくくくくくくくくくくくくくくく

一正年八年仔男下田の成通の任所志の由云

正年一高兼孫の時年為一月下田の事

名古屋より己の二月に兼つる流由承及由記

己の四月名廣るる事

松原孫正徳源支大園の由記云々列之太馬

正年正年大園中前へ正年

尊次と作

一正年正年正年正年正年正年正年正年正年

正年正年正年正年正年正年正年正年正年

正年正年

一正年正年正年正年正年正年正年正年正年

一正年正年正年正年正年正年正年正年正年

所長在り如城系ゆき成法九月 任有二月
九月に左邊は同年之祖成る由の田系
と云ふは御代

一 大坂意ノ西條ノ時呂陽里南に 作有田段りたり
茶切山行後備ふれり

一 大坂弁年ノ西條きん老屋段中初ノ西段り
東之向しとん天とん任有老屋段中初ノ西段り
段り必日年七月系部ゆき一病死は

忠能因情

一 岡京西條ノ時七段り下 拾遺柳西行在

これ

一 大坂意弁西年西條の時 台徳段柳西行在
柳西行在

一 西ノ弁三月三日来

一 大坂段の時城系ゆき一ノ大坂意ゆき一
ゆきたあまゆき一と信のゆき一ゆき一ゆき一
にゆき一ゆき一ゆき一ゆき一ゆき一ゆき一
ゆき一ゆき一ゆき一ゆき一ゆき一ゆき一
各と行て笑ひゆき一ゆき一ゆき一又城系
基と因て人ノ今と一に揚屋をゆき一

刀を捨て闘いし人々をこれとありの如く事
あくなりぬいし時中しきりそんたふたれて
これとあきき水とはくろくし一羽念のおぼろ
齋の大学生魏準の惶懼而死奉体皆書と
以く以る勝夜しあるにありい合をししもの
かきふぬの工のり

一松室の實大右の月令之書のいし古田蔵戸ハ
栲死にありしき人々大坂の時をくして殊を
られしを後大にのりいふるゆめをちあを
らけしはげん世の室をくこるふ人々けあ

おこふりしを對して華院の系入かきしは
おきこくしうて活てありありありあり人
るれかきいなきし

一有馬氏ハ

赤松則祐——出羽守義祐 直るし稀く高別
直る難く危し

中書入道則頼 兵部右大臣下室ハ細川澄之河祐七代之

玄蕃氏 豊氏 室松平保七郎

九郎二席 早世

大學御 後三書を豊長官の内

如子良人

中山中納言 石野和泉 有馬伯耆

室

忠頼

中書省の忠頼 西尾丹後女嫁す

松千世

玄尊の弟に松千世 如之寛文八年七月卒

信堅

長門守 寛永年中早世

源正房

中書省の源正房 如之寛文八年七月卒

頼次

伯耆守 源正房の弟

如子

福永右京大夫 山内右近の弟

如子三人

鳥井澄路の室 小出徳昌の室

則頼初橋の淀河の城にあり大岡に属し小田原陣

の後幸の横領を二万石を領し 金酒

の二大岡のとき二萬石を領し 京に當りて属し 其功

法正有馬殿二万石を領し 田に任し 玄蕃以

丹波福知山に万石を領し 法正下業長七年八十

條より卒遺領を豊氏に承て合て八万石あり

大坂陣より天満より陣し 其後由信より元禄

四年より大坂中書省を勤め 右徳より元禄

後に終りて其万石を領し 其の萬石の領し

父子あり 寛文十九年に七十より卒 其の領し

の後弟より元禄三月より勤め 其領の海上より

年二十歳なりて子松千世を後し寛文八年
六月十七日卒す其の原田原守智と申し長
子内匠及び方石の事あり是ハ少玉修成子孫
存ふる親信と云敷元ハ松平古出相ものいへ

一 表氏

三方重可成

江守山之殿主
元禄中四ヶ合戦討死

少藏

信ノリナチ相信長ノ車將成化アリ上ノ方ニ上テ賊キウ大園
ヨリ懐ノ金山ヲ得リ武藏守長ト云南九似チ合テ十方石ノ
才ノ千ノ由チ卷ノトス是右近左殿ノ長一長久ノ三ノ死ス功ニ秀吉
姫ヲ忠政ニ嫁シ侍後トス後ニ信ノ川中ノ山ニ移リ園ヲ示テ南九
属ス其功ニ秀吉長ハ年美作ヲ得リ大坂ニモ幕後ニ美作守タリ

南九

濃ノ岩村ヲ願

力九

信長四歳ノ時死

坊九

千之助

右近守美忠彦 早世

内記長継

二男三子家督ノ実ニ家長園氏ノ次子ニ成リ忠政カサニ
嫡ニシテ是ヲ生レ長継後ニ才ノ園但守長政ヲ直系ニ出ス
内室ハ池田信守ノ長女ノ子

美作守忠継

少室守信守長次ノムラ久隆君ノ後家督地室ニ年ノ
其年ハ八歳ニテ卒ス其子乃忠房切ナル才以テ長トス

伯耆守長義

新馬守

女子

招平三郎室
三井三郎室
招平三郎室

水元の東大寺より東港の龍之平水初傳りて十本を
畧説さゆく之玉海を以て鏡ヲ決り玉海水元れ
文庫に之白かき近衛殿に有りしと

又云類聚國史に十卷傳尾流の志年傳りて水
元し字されたり

一 水元の東港の南流の源より板河といふと
水元より南流の源を傳りて授考せられしと

一 水元の源より流るる流の系譜と志れるは元心
雲平といふ人なり

一 辰二月九日より行りて天壽院殿に於て中より板板
八分の紙巻民ア祖母之大坂屋城の時十に歳して
をりて天壽院殿を信後ひりしつと云ひのまひしと
名ありはさし教りしと云ふも之は極子ありしと云ふ
しりて信後由流に居りておとせしに一花堂
わや流といふに秀頼板由自害とやせしと
信後由自害ハ村中よりとてしつるもちて美奈
とりのり方にも中よりとてしつるもちて天壽院殿と

卷てきさぬ押筆でおとし来とて一何し松後
も石垣をつたててしりくく強りの女中も甲は
石垣をちりおとんともし一幾と後夜ゆり久ハ
叶は似とえ一し一堀内より水也依一てきさハ
入まつて似ね板のきさぬを五つとを鳴りけてきさ
るにのせうれて由依一し一多の死體のよも
と海へていおたし一し一その後大あの時一簾ととん
てるにのうてきさぬとてし一し一ふり時に大奔流
殿がけさせまいし一天神の巾着の法華燈と
云えんをきしや一し一おめて好殿(四つ)の内

一 といね板ちがすまやどらう我いよけるき時
一 大板板中しお後きし一きししししけるき
一 ときししハきし人おあしやしし
一 おりて後し一板中一の管作の花葉あじ
一 るきさぬお後し一

一 福ふよの敷の妙葉香仁皮とさうとてし
一 ちうてはけくさうれいちるうわぐくる水も
一 の尾張殿より由傳授なり

一 明暦の大火に意神の屋九哲不彦像年中
一 引事の巻お土境失らるるい意神あ

沙皇末祥を假しハハミコ者入ルルハ
聖朝より来りて冠後る多き也

一 南朝の元よりくいていぬ北朝降平し北野
家のことあり信之後光度ニハ河野源宗の家
として西段の役ハありしなり

一 尾の越田の神懸く造言の村入神威志を
とま

一 かつ作恭政孫ハ統天皇よりいへる侍
の所降をいへる也

一 奈良河合に聖武の皇あり盗をて王を

とら合をとりて天降ハ降ハ升をてとら
板合田内ち時のこと

一 西尾の城中の八幡宮ハ聖武のいといへ

一 奈良聖武の村尾風く友女のいといへる
肩もま今の人のいといへる
の後女帝の河合末をいへる
位の内於く河合末ハ殿定まらる

一 小見のくさの河合の河合末をいへる
けりるいへる

一 河合末ハ河合の河合末をいへる

侍達家の後や世上中も一途ういあしく山陰中御之
の後ろれは藤氏の七もいなるゆへに近衛家の社
かえりて應山公の切かたしとて其方の英が幸あり
しに政宗再々を考むるに利村を世利出つて
上洛の時ハ忠告あく出入りし政宗あしくお仕の礼
をみても美くはしむるに思ふかむらほしき
て一に自恥ふこのゆへに今に山陰に中御れし
は其の事をして遺言として其を頼まてしを
の火のみに焼ぬるに社のもてはしむる考を家ハ
若林村へも入るし厚くを執らして近衛家より

ゆかたん七と一の年書の月りては近衛及自
も加えりてしむるもあ例る又高津家の
近衛家のあつてし豊後の居しつ女園
をとりてお終にうえし二信及如もて権系
して由比の海へはむししむる権系を
し何と居いそく我事終るあしし近衛家の
ゆへにむをいけしむる懐妊仕ぬ我身いふ
もあむいばもほしむるさるるもの
しむるせハ後系も信及のいひはしむる
ましむる懐妊のすあむるはしむる

きしと披露しつたかに居り申したるも一と
津の國難皮のきくこゝろ上ゆゑ産して田子
こいしと披露しつたかに居り申したるも一と
くしと披露しつたかに居り申したるも一と
ましと披露しつたかに居り申したるも一と
の披露しつたかに居り申したるも一と
津津ハお前のつとまをいふも實ハ近江の
ゆのあししと披露しつたかに居り申したるも一と
この能といふして今も津津家の上下とも
健康のなすといふも信をいふといふも長
國をいふも

信ハ津津の家の人と近江及びいふか
かくしと披露しつたかに居り申したるも一と
またに津津家とて信をいふも今ハ燈矢信りぬ
水谷の家ハ冬別に信國の信をいふも信國の
信をいふも 津津志をいふも信國の信を
書とかくしと披露しつたかに居り申したるも一と
又と披露しつたかに居り申したるも一と
信ハ津津志をいふも信國の信をいふも
ましと披露しつたかに居り申したるも一と
津津のあししと披露しつたかに居り申したるも一と

ぬらけいものしに人にいふに流るるに

まじいよふ年近湯後四部くめうう後く

お軍勢ははしゆる今中主なるうううわけは

近あり津州公介ううう代くうううう近湯後

の杉子たるううう東の家は元中も五たふを東

度の疏族と嫁ふかして彼家へたまふしき子

たる更杉子とゆへ又ある家あともうおれを

にのちまたう紋をとりてゆうううううう

一 ^{アノカウ}天見持物の歌之歌に患うううううううのむきん
あうううううう堀川院の四時俊頼新長あうう

あううは近るあきううううううに人あうううう

ともあうううううううううううううううう

うううううううう又後宗ともうううううう

ううううううううにうううううううううう

の後の娘君後に明石の女師とてうううううう

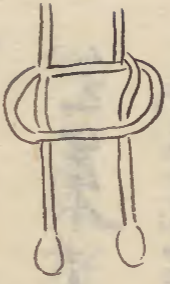
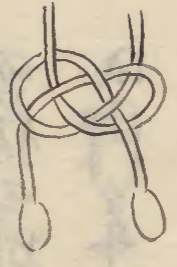
の御幸い系の君の若女うううううううううう

やうのうのうううううううううううううう

一 宿直あううううううううううううううう

ううう

一 結い



叶正正正
ありい正正正

ありち正正正

あけほ正正正

かけあり正正正

ありあり正正正

一 貝若 見合ふ交りのうれとつまこの世より始り

さゆとつりゆ源はかきもかん之を後る能流中

ありの歌

存せのうこイ
せんしちかめこの浦のうめつととるあきととて

ありありのうか

一 折紙費積 當五階トテ五石文夫一貫二遺し

涉積カ世積めて金と我八十五ナレハ十五ハ二十費

五枚ニテ一石費之

世積同善に

正月はりの始の積りもとししとて人たうとて

手にひきこいよくきこしこむつからいよこし
うらにふをそは月をさむつ月とあつけゆる今
のこよふと畧してむつきこしこむつ

川の松もつるよむつこしこむつ
なりし一松ふよとむつ行ひか代のかきつる
とあふたふれはししの路のよみ井にむつてゆる
又ふとむつりふふは山にあつて言ふは
わもふりれぬわふれは志ぬ縄といふわはた
縄にふつて縄のそしとむつぬわあつたは
清浄なるいふれなるそしとむつぬわはた

とたりるふふりうされは天恩を神の天の恩えを
おまひしとむつこしこむつぬわあつたは
の志ぬ縄へ海も浄をこしこむつにふつて神の
のむついしとむつにゆるけふ家影をいしとむつ
月の初を祝まふつるやそとらふえし

おまひしとむつこしこむつぬわあつたは
は是におかきもの蚊くいふぬましとむつ
秋のそしとむつむつむつとむつむつむつむつ
くふおんたぎのこしとむつむつむつむつむつ
わしとむつむつむつむつむつむつむつむつ

平相とて侍るもあつし二月のち月にお
くらむ月には生年の子の井とあつて人
くまきんして立雲の日の早思し一返して
土籠く入る女房うけつけておねをこぼれま
あさうまのゆたよをけし生年の子をむつたし
ぬらひてまよきこしうたへ私よむいひ井
水とてくこころ水と香る侍るよんまのそ
しえに波いさう水とや

延喜二年二月七日に後院より七種のところか
を佐らしんてく北登天神も和菜養賢

侍る侍るもれはむしう侍るしうのうや
十節に白馬と馬の性の中とて天の白馬
を地と白る天の月ハ地之地の月ハ馬る
しり中女ありまこ礼死といふ文とまを
那とむして喜馬七丈をあるとて侍るし
白るよとまを中侍るの陽の熱なりま
まの也きとて白るよのハまをさめを
ゆのちねハまをいもかひしう中や
七月に喜馬とていれハ年中ハ形とてま
とくハ文侍るいまのしらく人のまを

いふは是より始るといふ
爆竹千壽も威もいふはつらし男踏おと
弟中男女交よきをほとく肉にに
夜廻をこころして舞ををられしお統天
皇の四時ハ漢人踏歌を奏せしとや孝原
氏の物語のむらこしのよきなるまことなる
とかのまゆりのまゆりしは解風達のまゆ
にさつまつて千壽も威の夜廻をこころし
たは踏歌の常へつらま楽を奏せしとや
まんぞいふらくくくくくくくく

宵より初ハ初れとて昔のゆ程とて初
るの者し孝徳天皇の法にに正月に
をいさしむ十月廿日に初場始とて
かしのまゆりしとらつら末常とて
く天子も四時序より夫を四在のた
らふまの文武二道とていさしむ
に今天子も四時序より武を四在の
たつ世のまゆりしとていさしむ
いさをりておさしむとていさしむ
とていさしむとていさしむとて

わし村々ゆにさるる

卯辰ハこのつらうらこしし桃枝をとりて
鬼を拂ふゆの信をえぬおのまこととて
ゆれハ持統天皇三年二月の卯の日大宇子寮の
多てまつりし日おにさるる之ころに後仁事
二年正月信持院の被執して播磨とあや
ふ之ころたつこれおにさるるをさるるおにさるる
とふおにさるるもおにさるるおにさるるの作おの
くおにさるるおにさるるの仲くおにさるるの
をたつておにさるる卯辰をとりてさるる

+

たしハ生れおにさるるおにさるるおにさるる
くおにさるるハ馬をつくる之を長或ハ考ふまは
湯船をとりて沙枝をとりておにさるる
おにさるるの木のまをとりておにさるるにさるる
おにさるるおにさるるおにさるるおにさるる
の卯の日たておにさるるハ卯辰をとりて
二月をとり馬ハ信持院をとりておにさるる
いしるをとりて二月の午の日おにさるる
おにさるるの信持院におにさるるおにさるる
おにさるるおにさるるおにさるるおにさるる

るん

糸の白道流の中ねをい勅使くすくらすとむる
しあれ若はうすくうふんくめいろうら
の邊をいくうすく傳人たる
葉むんれくふとい葉のうすいて一切の葉を
いじりし中んこれくふ葉もあといか也のいんそ
くくくくいじりにかくれい思案をさくうめく
くゆ又はるもくあわわけめも羽伝に葉を
あわるものほくくく
かきく左志道流のも傷めくくくくのくくく

た

射くくの伝多んいさくの時かいせくあすい
まくくやんちのくくくめくくくく
あきいこのくくくらにむ流あくくくくくめ
くくかの流の流くくあくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
及傳くくく月報くくくハ仁徳の所代
祇園寺い糸の日に糸糸あくくく栗の四版と
たてまつくく藤氏将来の由伝くと承る糸
天治元年正月くくくくくくくくくくく
くく勅使とくくくくくくくくくくく

しむに侍し時のこととて大宮の目ハ禁年ゆき
ふもなるゆかり馬長あまをうつらふまき
ふくく今ハそ義もあたくは子の風情を
つらきううこころねあつるおほいあまのこ
ゆり首そそまけいれし降風をあらは
るから代ハ八坂里とくふぐうハ君うおま
かか入るしきりるさくおとよ程のこころ
音しうて天近の旧記よえ侍う山評を
いあつくりまのよして神の心をいさかて
まふ心も天照を神の思ふてこころは
ま

十

内柳の枝くまのののよとるけて神楽を
うたひ音くさ感くさいしておほい
神もおめてらるるのあや
なも月後りち武天皇のら時うら
かうく大くくくくくく糸花門もく百
一回くくくくくくくくくくく
たあるとしてハな月のおこりのくくく
ふもそののこのうのめくくくくく
るくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくく

てしるすつるばつしつ奇を祿しんてん
七夕仙翁花と人ごあつしつひ七月七日
乞巧蘭といひて二里を多く香花とるふ
るしめきくしつや侍しつ志うれはらふ花を
人ぬもとしつるあや仙翁花は説話の仙翁と
しつらしめしつる名とさつしつてん
唐書ぬはらへ之さつあや
七月とあつしつる八日説話とすあやてん侍
しつ垂仁七年七月とさつ
八月船日にあつしつて人ごあつしつてん侍

七

ゆいひさつしつに説話しつ世俗の風俗と成説
しつ建長の比しつはあつしつてん侍あつしつてん侍
しつとあつしつしつてん侍しつてん侍しつてん侍
あつしつあつしつしつてん侍しつてん侍しつてん侍
又田明と大園の文永の花しつこの七八年とさつ
このしつとあつしつに天下に流布とさつしつてん侍
酒と建長の比しつこのしつとあつしつ又後醍醐
院のいましつとあつしつしつてん侍しつてん侍
侍しつしつしつしつしつしつしつしつしつしつ
着しつしつしつしつしつしつしつしつしつしつ

ともし之侍り候多き業とてめり候
にきき書とぬきんよの公さしとて是侍り
賀と能とてむし入分り候上の上の道達
とて昔殿上人が談話状とてむしひとて
藤と撰入候とてむしひとてむしひとて
しハ堀の院のし時とてむしひとてむしひ
えしむしむしむしむしむしむしむし
られて院出相とてむしひとてむしひ
答の作られしとてむしひとてむしひ
思ひ候とてむしひとてむしひ

廿二

神皇正統記といふれきの尊嚴経目されし
又此方の本末ちとてむしひとてむしひ
とてむしひとてむしひとてむしひ
のた社とてむしひとてむしひ
とてむしひとてむしひとてむしひ
年の所高とてむしひとてむしひ
さて卯邦の本書とてむしひとてむしひ
とてむしひとてむしひとてむしひ
るれハ保古とてむしひとてむしひ
とてむしひとてむしひとてむしひ

のそくうしん之傳り

いひのほほしきしんとして大やけかつてこころに
こころをほほしきいひのほほしきに
とらへしめられたるまじいめでたう上さぶらひしめ
いし年中の事とすいふ物と之傳りかき
たのまじきこととすいふ物と之傳りかき
まふんぬり傳りて上へんか下へん
いふては解と念とすいふ物と之傳りかき
のそくまらる解の解同とすいふ物と之傳りかき

た

てしんとしていひのほほしき

十月廿二日焼として神火をいひてあつた

たしんにおこつていひのほほしき

として徳神のまらめてあつた

とすいふ物と始とすいふ物と之傳りかき

天照大神のまらめてあつた

徳神のいひのほほしき

かひらむとすいひのほほしき

いひのほほしき

あつた

このころはともゆはるふもて形はく西和楽の
ゆてはるえ友人の庭火をハ焼なり後白を乗れ
ぬ一人かしてふ候の人よりあひ庭火を
おらたふもふりつめてま之はるはいた

右世儀同書は後成恩も祥園のうしめ法之
とてさうの紙もくさき筆のめとを強
一はるはるいもいつるむつきのそしをさ
永のこれしにしして今條をさるしあ
ついでにぬの印さうさるしは目録のしあ

て廻るしつに桃花の林もあはしつるさ
のちまをさつくひさうのきほりさうし目録の
あひさかきさうし月七日あひさうし二月
海のしつるさるさるさるさるさるさるさる
くしをさうきあひさるさるさるさるさるさる
世の流とあはるさるさるさるさるさるさる

天文才ナニ曆申さるし向り

正三位権大納言藤原兼家 牙止十才権之

一 中髪 俗は友すあろさるし祝髪ゆめをいひ

よん通澄北魏孝明帝孝昌元年

教有公の附其三位に足る百返されし在武田の
四乃ホかく此をせし之實公御孫之と云ふ
東也れさし其の西雲のゆい別のふち長教
ほらち事教さるふしつ僧等之阿由信成流の檀
那さるなりふらしは入移く来りてち心を流
しをし彼事教さるふしつ力と貴ししては後
を流してゆかざるのかけふとさうたててゆか
るふしつ之彼事教さるふしつはしつんはハ
事教さるふしつんはあつ事教は流馬
るし檀那ゆて東春院屋の代々あなを

由も之信ゆてあまちとめし依し東春院も
黙止し事教さるふしつんはしつんはしつ
ち貴しふハ事教さるふしつんはしつんはしつ
しつんは事教さるふしつんはしつんはしつ
七五十一とて流し破却して退きしつんは
しつんはゆめゆめ信ちしふ又あな信ちのうけ
ふハ告巻のふしつんは信ちのふしつんはしつ
てふ入信しゆてしつんはしつんはしつ
○二階寺ハ春院之○布施之告之信也
厨賢まハ信後人之信也子延えハ比人之

○舟田平氏之○武成親尚流後子貞經子胤

○宗武流後子俊之位下建武ノ休之十

○武成流後子原安ノ比ノ口東地ノ後氏之位

下紀後子大系右美武皇ノ二帝武時入ノ寂

阿ノ中一子之從下下肥後子武澄ノ寂阿子之

從下下肥存子武光ノ寂阿ノ八子之

一千葉氏流ノ宮内中補從下下稱東ノ右系

貞治ノ九十二年又下總子氏教才子之

○千葉光流ノ豐後子從下下稱京實之七二六

年ノ葉介流親ノ子之

一高城流從下下野子下總大乃口敏之天正十二

丁亥二年子葉氏族之

○女昌 從下下介勝流子 天正十二正七年

親流 介下下 天正七口口口口

邦流 介下下天正十六年

○佐竹從之位下左近將監方ノ如義信ノ康之

元七十七年大信右美義尊ノ子之

從下下右系右美義仁美八上ノ如憲之

佐竹厚卷ノ子要ノ女惠ノ元十二亦四戰死

後五下仔与子幾俊八義仁ノ子文明元年一古記
卒于子後之位下在馬作義治歸于卒時
延徳二に女五卒後下は後俊義重ノ弟也
幾照子なり 年長十七日十九卒

一 飯尾ハ善氏之○多智ハ中弟之ニ思進ハ人
豊原与後之位下 下日代思仁文昭ノ人 膳
部云和由氏家流判あり

○ 陶ハ多良氏之○ 下東野洲法名宗傳ハ中弟
是之弟也 女子ノ子左宗多也 五下者和

○ 松田者宗氏之○ 額田越後与後五下者宗
宗継永山比人

○ 上月ハ源氏之○ 飯沼源氏之○ 尾子源氏也
族之○ 十布中弟氏之

○ 持作ハ友氏之河内与執事小山氏庶流世継
山氏居河内○ 是山友氏之子 四弟丹波与北条之
弟居河内城 永流六正八幾國府老

○ 上中陸奥与源信也 是先世仕室所 弟系
為上智日乃氏也

一 舟友右左衛門尉 孫貞ハ義統子之○ 額田
伴賀与惟政也 伯人天正元 幾死 掾津中川

後秀が獲て了

○三國ハ保氏之○松永友氏之○宇野亮多兵衛

○龍造寺ハ友氏之○宋田孫家平氏之

○丹羽長秀平氏之

○白戸友永主通忠通子之在平戸但了了後

之下水三城主天心中存依竹氏取城嗣後

○攝ノ塩川ハ保氏之○荒木村重友永氏之保

信忠与保津与後之位下保津与後居伴母

○天正ハ年謀叛七年際迎赴安永遷隆貞

志

○榎等之玄室以昭光任將軍義昭 山城入之

○石田五右衛門澄之成久之友氏之

○谷合刑ノハ保氏之○秋月ハ大藏氏之

○山中山城与長俊榎氏之○桑山修治主

友氏之

○古方ハ日向雄久ハ在馬子之保氏之

○九鬼宗隆ハ在自之保實渡子友永氏之

○田中幸右衛門吉政榎氏之○奥田ハ保氏之

○榎尾茂由在永氏之○平宗正斗以

氏之

○新在路河子有氏之○中川修成源氏之

○子橋右正孫皇大孫氏之秋月七月龍集

之

○滝川下総守剛利、行統、人木造、左中將俊

○茂才之子初稱滝川三郎、信房、仕内右長平信房

後仕園白豊長秀吉賜稱宗氏之○依此

有氏之

○氏家為隆入及卜金子從立下志与元政有氏之

○七男我孫恭氏之○斤相八源氏之旦元八源右人

○貞貞才一子始八貞貞才一子才一子才一子

加三信

○秋田城少女信美、市子、愛市子、子之

○古田織了、心者、系、主、孫、○板倉八源氏之

○思田原氏之富田信徳、信八源氏之、其、七、十月

流、於、奥、ノ、志、城、○永井吉道、初、皇、正、孫、八、七、田

子、右、馬、門、平、重、元、子、之、○佐久房平氏之久右馬

盛、次、子、由、秀、与、安、政、信、別、版、山、城、之、實、元、孫

女、五、平

○降、次、賀、家、政、源、之

○青、馬、豊、氏、源、氏、之、○少、孫、有、氏、之



○吉田源秀仲判發名主覺辨肥前房作本
族之席在史の秀信子

○大塚平清幹判發 七子初居在後水之檢後移

○廣中城惠永年中之

○蜷川氏官道親元弟(貞)増子新右馬

○下野名之妻善和分其才判右馬親長

○判發名右道標告書及和奇の版屋在右馬

○之善名房長跡比人

○赤坂ハ忠之系族源氏之遠江并侍告於

赤原氏之跡末之席之史手改うらむの遠の并

侍告菅原(一)席右馬源元景の柳本源七席

信光親細川氏 云云及系之存徒之史

一 云云何列馬帽子形人

○塔和源氏之其之段人細川親之葉原之

ハ搦氏之

○芳賀ハ信氏之別下小之席一長居ハ大花が浦

安治子源氏之

○岡井江作以貞之友氏之岡井兼兼房順眼

天文十九年没于子順兼小字友清大和

復号陽兼房天正十一廿二没 兼之在史

可成元龜元九十九を白坂本戦死早八頼房
子源氏之

○橋ノ小吉源氏之里田目一○前為平入頼宗人

頼宗氏族田中頼宗
○忠信書 信宗人田中子仕少宗氏称坂
源氏流の國の會改字氏

○伊佐宗流右衛門守左衛門忠棟平幸侃之

○尾ノ作治平幸氏之 コトシ危揮教子

命成主作治平幸公命信方子丹波國信秀女利賢
号巨成實之承十一年九月十九日没也

一 頼前家代が後宗月ハ信州其田の戦に平修

○此平美とて急以つて石原頼朝に
に任じて大岡のち坂の城を以築く事

此平美とて後...
行人か...
友の某...
妻とて又妻...
父之右馬...
たちて...
向ひ...
の妻に嫁...
しんあ...
日原...

行人か...
友の某...
妻とて又妻...
父之右馬...
たちて...
向ひ...
の妻に嫁...
しんあ...
日原...

友の某...
妻とて又妻...
父之右馬...
たちて...
向ひ...
の妻に嫁...
しんあ...
日原...

妻とて又妻...
父之右馬...
たちて...
向ひ...
の妻に嫁...
しんあ...
日原...

父之右馬...
たちて...
向ひ...
の妻に嫁...
しんあ...
日原...

たちて...
向ひ...
の妻に嫁...
しんあ...
日原...

向ひ...
の妻に嫁...
しんあ...
日原...

の妻に嫁...
しんあ...
日原...

しんあ...
日原...

日原...

相...

又入る所はたゞとて進めりていふもて付
と云ふはあはれは何れもろて致れりて
きこふ所とて刀を拵て斬ていふ所とて
ふくむ所とて其田元佐田元大井新右衛
門下と始とて 祐忠の強むとて百とて
車とてちりぬ人々一圓京の役とて
長等

台徳云へ御下なる修理を更とやいふれり
の先降とて信守とて一とて一とて 台徳云
百とて一とてや信守とて一とて一とて

宇都の美の跡とて一信守とて一とて
ふくむに其家とつとて一信守とて一とて
ハ山とて一とて一信守とて一とて
忠直とつとて一信守とて一とて
に信守とて一とて一信守とて一とて
加茂宗月才とて一とて一信守とて一とて
とて一とて一信守とて一とて
月子とて加茂内膳とて一とて一信守とて一とて
片島とて一とて一信守とて一とて
日上恒亦治と

神書の奥義を傳へて兼後七十三歳に
卒去るるに於て遺言を傳へしを
一〇九に記し置るるに於て兼後の傳へしを
授け置るるに於て兼後の傳へしを
記し置るるに於て兼後の傳へしを
記し置るるに於て兼後の傳へしを
記し置るるに於て兼後の傳へしを
記し置るるに於て兼後の傳へしを
記し置るるに於て兼後の傳へしを
記し置るるに於て兼後の傳へしを
記し置るるに於て兼後の傳へしを

是よりして卒を記したるに於て兼後の傳へしを
記し置るるに於て兼後の傳へしを
記し置るるに於て兼後の傳へしを
記し置るるに於て兼後の傳へしを
記し置るるに於て兼後の傳へしを
記し置るるに於て兼後の傳へしを
記し置るるに於て兼後の傳へしを
記し置るるに於て兼後の傳へしを
記し置るるに於て兼後の傳へしを
記し置るるに於て兼後の傳へしを
記し置るるに於て兼後の傳へしを
記し置るるに於て兼後の傳へしを
記し置るるに於て兼後の傳へしを
記し置るるに於て兼後の傳へしを
記し置るるに於て兼後の傳へしを
記し置るるに於て兼後の傳へしを

一 飛ぶく酒をこぼるゝ凡酒をこぼしたる時
いそがしくあひめをこぼすてふかしくをこぼる人
んをるものもかきこぼるるも近宮の後水戸の
光玉のうら山石のうらみきて一巻の巻に
しよしししし

一 延喜式図物と云々をこぼるるては延喜式のも
こぼやうに海ぬり

一 陶系の記これに大蔵冠陶系よめての記より指
かきし使よりふあかしくそのか秘してせし
名をこぼる人かかしく書かしくしては指家

の飛道よりふもこぼれをこぼるゝ稲さの稲さ
のいそいそあふくけ書こ本家をこぼる白紙を
士社のアさまうらねしものい書にこぼるん
しつめん

一 豊秋のこぼれも尹の大細を仲分るまでは使
られしけいさくならうては絶しこたう

一 漢系のお業の説我に車裂大坂非といふ
しそくし大字中庸のしし康富の死をこぼ
使ん度りされし

一 市使さるゝの像は太坂のたきにをこぼる

一 乳母の危しうして剣造とて有之二歳の像十
六歳の像是は世にありは十二歳の像もこれハ唐
冠とぬぎと帯むの像也

一 素山のうら良水神の像を住吉恵女といれ
こゝに恵女といふ神の人の冠はにほかり
思したるともんきいころし出立きや志
くれとも聖徳太子に十二歳の像もこれハ代
標してつたにも因てしとも其冠はと
うろしと因てて母の角に隈かゝりしと
そまにうろしとてかくてそ後う恵女の社の

一 不とうのこたれて石擲をいころし内ふるに
もろくもぬ一揃るそぬの割恵女と因を
しとふまそふしもかくそ志うれハ神の擲
にみやとゆかりころやものこゝに對談
したるし社傳より告て恵女と因の神
恵に恵としとと感嘆とししゆれぬ
う物言なり

一 孫作の家狀に利仁が軍夷賊退治の對信
のこゝにゆきて神ゆをいしれしころかちのあつた
紋の指をたたるく因の皮の上にもとを指

やして笠身をを耐いし建礼儀たるくしそ
は後の胸皮よめきてとることもいふし流儀の
縁をにんたる

一 幣ハ麻なりし番幣ハ梔の木ノ皮なりし
ハ振を川さきそたる歳しり試にいふ
歳らえきぬえとて烏帽よのいし
衣皮のゆもらのはくそいぬ色より始
しる

一 歌仙の因を礼あつてぬこしと字よの教
にわりのありあかありや

一 出雲大社に竹笈文をま書ける物多とあり
礼代の文字よしといへん又熊野の社に
累代の付略て近幸の記ありしとて
の

一 西宮記に舞踏の付のたたハ地上の塵を拂
い去るといふれいむしとの社の袖ハ地に垂し
一 六條殿に小笠原の衣ありて狐尾の衣を
た山科山しめといふ

一 持明院の御小瑪琏の角帯あり
一 吾国よの衣ありて武蔵守より帰るきたる

一 而さうのちゆく大蔵の対の画像をうけて市を
 ありし守破像に多ふちをたに送まし
 送る事ありてしつふ事とよして幸と
 送まはつてうれはたぐ價をいふ事しつと
 してしつてゆふを東園の友をゆ後
 して大蔵嘆きしと但し画像うけて
 使しるこれつ子のくゆらるゆふのあま
 彼所中ありしゆられしとゆきしとた帳
 して信うきて浪形をふて九く三つ図せし
 ありこれの流えを武筆の月陳むびつりて

一 ちく冠ハ目か託にんしつ摺にきしつ
 てかこましとして笈をたむのゆめて執
 て膝にゆてたてし景之角市ありし
 て唐人の因のしとあわむむしつちつと
 佩一容之しものわつちつてしつと
 一 及因ハこバイししゆの馬歩之れにこハイ
 ちつてしつて陰陽ありし
 一 上信ハ結今のさしゆきの藤りし結あり
 上信之これし今ハは家末の秘にあり
 たくし結の対ハ下に小橋とてしつと

さしぬきころりこくればひきてくさるときて
ととろえ縁取流も今りも活たの久き時を
こゝろ山科のあまへ四糸をたに西家よりくさ
とあをきてこゝろに對をいつけてとあをきて
こゝろの玲めればねのまゝあまへかへるえあ
あをきてとあをきて又返してあをきてとあをきて
あをきて井取七々の鞠と院の枝とあをきて
極秘するりかゝるえとあをきておとて水午の袖
とあをきてとあをきてとあをきてとあをきて

一 例をいふと其割付とていかに茂系を

時に入らぬありと比が茂系を其の何れも
余あつてもあつても今のあつてものこしとる
あをきて繪とあをきて一に保馬樂とあをきて
街上活しとあをきて院の由ををあをきてかしとる
あをきてとあをきてとあをきて一に院の何れもあ
あをきてとあをきてとあをきてとあをきて
一 序ぶるに茂系をのまゝとあをきて院の何れも
一 軍序とあをきてとあをきて院の日月の終つた
割付のあへは院にのまゝとあをきてとあをきて
あをきて極秘とあをきて

一 他少政殿及びの中ねたるうし時後光厳院帝を
 時以申ねにまよの而をことゆんをまをさきや
 一 ちて檀紙二致にかきしよのとも極うむし
 一 てんをむかは是量に大園よりは参内めり
 一 福ハ園白後一位大政大臣臣量に別位
 一 秀吉殿忌祿物領首依乞とハおしたる
 一 秀吉のま、讀ありあす次ハ院名の御あり
 一 二つを来めりものとありてを来殿を薩州へ
 一 死流ありたきこのよをたたりしあ房も
 一 のよえ前房もこと紙後藤信國景宗のま

一 には一とと小田宗へ入らぬし時むさ
 一 一とゆ成之早利及房の時も信吉に依あり
 一 一と一とあ房もに遊了、薩州へ信吉のま
 一 あり一と不薩州へゆちありのま

一 七九席大馬あし、信連時成のを梳き今
 一 なるゆむし、はととてあし、ゆしあ之きこと
 一 一と之ぬえ、梳きとらるる人へ加別もハ多
 一 一これハ信連能別ありし時合のゆに梳き
 一 一と死人送し梳版を梳のくらつと一
 一 今に七のあゆして正月元朝ハ梳版を

解りし事なすまひし事なす大端な成りぬと
婦をいふ事なすに十二のわ見獲くおまじ
さしと恥をいふ何れもと世に播種の後
人の事なすてまじいといふけりし事なす
ハミゆき住らるる傍の事なすて薬のめり
に力も振るをいふ事なすに一人ハお髪のを
着て人ハいふ事なすの思ひぬれぬこの事な
世の事なす風をいふ事なすといふ事なす
かたはいふ事なすハ帝等の事なすて
ていふ事なす勢をいふ事なすていふ事なす

いふ事なす人ハいふ事なすの事なす
一族の事なすいふ事なすいふ事なす
たし今世の風俗にいふ事なすていふ事なす
といふ事なす決して古の事なすいふ事なす
いふ事なす小所等事なす事なす事なすの
いふ事なす

いふ事なす事なす事なすの事なす
いふ事なす天台宗事なす事なす事なす
いふ事なす事なす事なす事なす事なす
いふ事なす事なす事なす事なす事なす

名之友にありて

一 平國彦冠めて西にきたに系られし大膳
の帝日本の子の西にきたに系られし自得せ
られし

一 北平淡路友に人をも王國の勢とて死を并位
度越船の何者考に何某後めて名考の
一 いかたはとて又うりたてて天奈未至申し
月言に海をいりて帝をいりていりて
一 秀吉も田島の地を賣らねて城をいり
とてこれハ少少川隆系う尾尾の法例

いとおられしとていひて長陳にらねぬ城
しるしとて度へしとていひていひていひて
孫我孫石領山ハ秀次を名代しとて隆
系とていひていひて大膳のいひて 京都と
系とて一五月のわたに京に上り改勢執
行しとて又も向ていひていひていひていひて
まよつしとていひて系は取らぬとていひて
の長陳はとていひていひていひていひていひて
をいひていひていひていひていひていひて
に城とて及らぬ人いひていひていひていひて

のら活地ともうそはわくに徳をと記
て病うち入られぬ地として徳人牛原の用
こせぬ城のまもそあつたふとんもまもるよ
うさあん後うう東京に歌うるそを乱
舞させ城中に牛原のやと志をせむん
ゆりあうと一しと一と私あう父元統もかく
謀やあしとむむあり取しをいものも
あうとあうましかる孫いんともはうたうさ
しとを八代々の名人よりかと感しゆりあ
かのみあしと中に秋原に夫ううあけさせ

白雪つけさせきて要害捕らぬと城の
人きととけとあしと毛利と戦てゆ中れ
むるれの城攻られとあも城のむむの心
に二夜のむむに夫ううあけ白雪つけられ
たうとそ孫のむむあつとこむちて夫念原を
の具うとむむとあ板あつめてとそよとと捕え
板あつてとそとそ城のむむにととと
むむの城ととととつけと雲のむむに
え板とととととととととととととととと
て今ハ天下の富をいしてととととととと

二夜の間とくに石垣を築きてかく楢川出を
仰りおつれぬるのよしハ城守より寄りの
あつたゆとてしゆ床の月おつてもさへ
大に氣つうれたすそのち徳宗又秀吉を
いさめて今ハよりきりやとあり 徳宗も
うらわつて西へうらうらとあれた
徳川友に孫のむしに 徳宗を北条と
ゆりあれた謀くのそとへもききと
ぬ人してそとをむかへしとてうらハ浮田
秀吉にのこほらるるて秀吉謀とあり

そ城の上をいひよとわらへハ志概十郎白房
あり秀吉のりしうらうらとあり 秀吉
とよつててまぢお入を使としていよと
うこめられハ志概をうけた西へうら
ゆりハよらむてもぬまこと名に
あつたるゆらまひ目とぬらうらうら
軍意のりしゆてハ一戦し勝負を決る
しこれ武士の名とてやあつたきと
筑城しこるハ新居もやうにわかし
よらむとてハふらハ南に徳川十将

生駒十とくまのまゝに上りのほいあつゝも
いつし一登をさくらめられぬともあつゝさ
つゝいひあひ保八字田家を花房助兼
りたらしめきし一あふ山根いしとゆめてさ
く旅人懐保くくくく懐しきよきふ返着
して使と返し強て秀家あつゝあつゝ
て後浮田うりしとく強あしと喜信とを
さるゝの度くにおふらの使ハ利川^ハ信と
いしうて比す七八もは岩龍英^ハ藤六りの量
ありしと使とを或時志根うりしとく一返

もん系あつゝして一木に幾丁死さむしと送恨
ふつゝ福ふくはむかになん系に入らるや
とつゝいおこさられハ秀家あつゝあつゝんか
まことと志根の悔のを矢念によれハ秀家
場ちかくあふりうて一木にん系一秀家
のちうつゝにけたまつゝ一うもまさ
うて是し一志根及の益をこつゝいし
付れとてさるれぬと後秀家いしゝに十席
くしに使とてさうくこつゝいしとま
あつゝいひまてかくしと北系及うり

北条氏と徳川殿との間に秀吉と北条
権左とが戦いありし中、北条は
北条氏と徳川殿との間に秀吉と北条
権左とが戦いありし中、北条は
らいては徳川殿ありし中、北条は
うれあり又ありし中、北条は
秀吉と北条氏との間に秀吉と北条
いありし中、北条氏と徳川殿との間に秀吉と北条
にありし中、北条氏と徳川殿との間に秀吉と北条
せありし中、北条氏と徳川殿との間に秀吉と北条
の間にありし中、北条氏と徳川殿との間に秀吉と北条

北条氏と徳川殿との間に秀吉と北条
権左とが戦いありし中、北条は
北条氏と徳川殿との間に秀吉と北条
らいては徳川殿ありし中、北条は
うれあり又ありし中、北条は
秀吉と北条氏との間に秀吉と北条
いありし中、北条氏と徳川殿との間に秀吉と北条
にありし中、北条氏と徳川殿との間に秀吉と北条
せありし中、北条氏と徳川殿との間に秀吉と北条
の間にありし中、北条氏と徳川殿との間に秀吉と北条

て門を突くとおれしとてふかしの城
をせよと人のこに城にゆきしとてあか
等におのかをいかにしりあつてその
きくはるのち園より一まの城とせよ
しやとあかろし 和隆のこころし
きこえしとてふかしの城に
おれあはれなきとてあかろし
うは園のあかろし 和隆のこころあかろし
にこころあかろし 和隆のこころあかろし
うは園のあかろし 和隆のこころあかろし

藤まつねのこころ 徳川殿の是れふつとて
北条殿も城をいかにしりあつてその
て城とせよとてあかろし 和隆のこころあかろし
しやとあかろし 和隆のこころあかろし
うは園のあかろし 和隆のこころあかろし
徳川殿にあらうとてあかろし 和隆のこころあかろし
うは園のあかろし 和隆のこころあかろし
徳川殿のこころあかろし 和隆のこころあかろし
うは園のあかろし 和隆のこころあかろし
うは園のあかろし 和隆のこころあかろし

大坂の城をとりぬけし時易くしるし合を
て入て城を破らんとして丹波山の合を
合にのせしむるに仔細ありのり城あり
ありく川を渡るも難し甲斐の合のよき
田のありし年久しきものころの事
能くしるししるし合を破りてか不
よの城を破りし事ありし事ありし事
夫も山城ありし事ありし事ありし事
しして又合を破りし事ありし事ありし事
をふつとありし事ありし事ありし事

應もは板をとりし事ありし事ありし事
つめてある事ありし事ありし事ありし事
松の板ありし事ありし事ありし事ありし事
ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事
つとたしるし事ありし事ありし事ありし事
られし事ありし事ありし事ありし事ありし事
秀頼の事ありし事ありし事ありし事ありし事
の事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事
甲斐の合ありし事ありし事ありし事ありし事
用ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事

下しゆらてに免にならぬ 赤康あさ
ましきふゆにおきいそ色くに云つて
し免ゆれし 赤軍よりひのうさけ
うらうらうらうらふ城のなるんゆき
しうらうら 赤康う款さけいゆにあり
赤軍こらう 赤軍らうらうらうらあり
ともわう涼女のまじりあしあし城
なるん分よむてはらう涼女いしんふ
赤康今まてあし涼のあかうらせ
あんと目のあにうらうらうらけま

行あまうらうら 行をうらうらなる度
及後友にあはるて 赤軍は田男なるん
そこし田男うらうらうらうらうら
しうら君なるんあしあしあしあしあし
いして天下の静置をけしあしあしあし
ふらに回し田公なるん 赤康と赤軍
にうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうら
赤康の田男はあしあしあしあしあし

きこぬさうはとては老後度御事作度
板倉侍堂より入るとして
お軍政之大所
下より信見入るにしかくは度致して
まふつとよのゆゆし
大所おふつのかさ
てゆき日々をいっハ親の命に背きこゝろ
まんとり也れをいっハ和懐をいっハ秀頼
我と指つきむよとも和懐つらまうれはの
志すいふくしてはかすあつとて秀頼いっ
まがむいむあし
秀頼の子をいっハか
はさるるにそむつたをむり
信見志こ

ふつと信見
大所おふつのかさ
てさてもお軍政之大所
のこゝれつとてこれいしに大きき御事
されしをいっハ教訓してと備なる
生れつきの命をいっハ足きにもあつて
左によめて和懐ゆやれおはかむして
にむつとゆゆしあつていっハ上
秀頼も家康よりいっハ
とて信見をいっハ
家康よりいっハ

なまじしけ上ハ秀頼いっおもさるる事なまじし
茂城の難とひしうれこのつちをうさへ
お軍とさるるいしあてしとて利権のさ
しにハ印郭の落斗り埋めぬる事と志し
めてお軍しけ陳をむしうれしれも後
序とめてさるるしとてあらさるるを後
たのしとておりふ事とさるるに外の
一帯埋めらるる事ししゆきハ海と内と
をて埋めらるる事ししゆきハ海と内と
集人あまさるる事ししゆきハ海と内と

たる人よりにかさるる印郭の城よりさる
二の丸の城よりさるる事ししゆきハ海と内と
秀頼の所使来てしゆきハ海と内と
の事ししゆきハ海と内と
さるる事ししゆきハ海と内と
上野の城よりさるる事ししゆきハ海と内と
さるる事ししゆきハ海と内と
埋めぬ事ししゆきハ海と内と
て上野の城よりさるる事ししゆきハ海と内と
さるる事ししゆきハ海と内と

おぬのつゝもにさしてしるるこゝにさきよく
のやこしきよかしたつめれあなあともい
ふ人まといひこゝめにいそしつし
ちのまうにハあさういんとそまて大地
うきよしてまねたをさるあま佐辰
ちにあのいしとてハ佐辰もあつ上柳介
うらけけしをいれぬのもあさるや
たしもあぬ不えさよたつ今いゆを
大柳あつアさめし二三日風を感てはる
まらぬ茶とも後しぬれやうたひ

らきいひし秘傳多しとて中をつきかて伝
るてうらうらぬそ後の佐辰もあま
にとりうらハ板倉に佐辰も板倉ハあま
つ佐辰もいといはあさし伝多しといふ
とわしらるわしに坊ハあなまて埋ぬとき
うてあま板倉大坂の由をとりて
大柳あつしあまのい役のなこしつし
あつし二人ハあまのい役を佐辰もとい
もあつ坊ハあなまて埋る人丈一人もい
佐辰もいといはあつしとてい

にかつる奇怪なるものありしかしけしは人々
かゝる事の上中少を始て之を兆するもの
ありといふべきものありといふものあり
後には後をいふものありといふものあり
ハ 大坂の事田原を攻られしに武田が
いひしをゆめて和議のものとハ 和議は
わしと後には城をいふものありといふものあり
にハ時よまゝ和議の後二度攻られし
ハ攻られしものありといふものありといふものあり
いふものありといふものありといふものあり

いふものありといふものあり

中野を攻られし時 徳川殿の軍池が
攻めつけられし徳川殿の軍池が
又橋を攻められし徳川殿の軍池が
たつとて 徳川殿は郭を攻められし
うき伝たつとて 徳川殿の軍池が
たつとて 徳川殿は郭を攻められし
いふものありといふものありといふものあり
いふものありといふものありといふものあり
いふものありといふものありといふものあり

あゝの源原ふさあうてそを松をさし
杉もえ東あうれかういしううたうい
よくんちうとてゆあに集うかくとやん
徳川殿又橋うくしとあう信をさうの陣
いらく向ねえうううあいゆさうかの橋
のいひらうなるあやうううとんたに新橋
うううしし海にたてううううきあう
集うてかくしとあうの対このかし世にい
しうなるのうあていんめれうかしのうハ
あしむ舟はあうしとあいしうハかくし

いんがハうのうもあうハ源原あハ無合
さるなるのうまふとしめ直政う信承う
早ハのうあて後かくハ葉うかてあう
うてけ郭政らうしと信うれハ直政う
に属らるたる源原あは信之科に系うあて
かすしの直政ういん政うんたうんとうん
しあうしし信らるるあしとて政うんあハ
たう人政承したうともあにうくるうか
きうう信ともしと政んとうん人あ父
兄と始て一族のをあかれらうた

この名にこそせんと思へる勢に不足なりし
物とておのひして西家のまのめを才あま
のい使ふまからよ 政もやとあると
これに後れをさるる一しこのまじい
一病に入るるをしよせし東のまじい
足佑父あも馳りりしわしに多勢に
あつてつるふ藤曲偏をとしに ぬ
あつししとて直改うは橋のまじい
ふたはとては郭あちうとも次の郭とら
まじいしとてのまじいしとてのまじい

あさうしとてまじいしとてのまじい
しとてのまじいしとてのまじい
とてのまじいしとてのまじい
たそりまらうさけて指下るる
まじいしとてのまじいしとてのまじい
してとてのまじいしとてのまじい
まじいしとてのまじいしとてのまじい
まじいしとてのまじいしとてのまじい

このまじいしとてのまじい

恒并曰後まじいしとてのまじい
まじいしとてのまじいしとてのまじい

は第ニ度殿の由縁がやぶれてニ条の橋の由り
かゝり傳ふの所ありしに光る之しとれり
左近の櫓のししめハニ条と並てうるもの
存てあきこうふを例として行てそニ条ら
りし人の子孫今も年にニ度天子より
茶をよむるといふは何段かし松のゆかり
れつけてたといハ百人一首伊勢おぼろし
りあれつけて御簾に結つけておくに目を
淨すのちうままハ夜中と傳てさしおくれ
たうといふは此ハ系中と云ふ料とて

袋ゆて糸をとりうぶてあるきこしニ条
ニ条殿よハ名とるいふ

堂上の廻も今もここの界にわたりたる後中尾
院のしりしをハ橋ぶのゆえとてハはとてし
とて殿元ハいふるにうまかともハはらへる
ゆ裏堂上の何風聲にききし母り竹や
ハぬきやめし伝をうれしとて

貞徳のこいしハ今もやまの人のこいしとて
しめニ条の人のこいしとてハあといふとて
し居尾は道にのこいしとてハ信七石園

の後に一愛と申しんといふれしは
吾田の領ありし山陰の中細を吾田の
社と御徳ありしに千後万里の御家の
に賞賜されしなりと云ふ事と吾田
の田代はと申ししなり又吾田の
に賞賜されし吾田の御家の御家の
中に吾田の社ありしに吾田の御家の
ありしと申しし吾田の御家の御家の
ありし吾田の社の御家の御家の御家の
ありし吾田の社の御家の御家の御家の
ありし吾田の社の御家の御家の御家の

齋場は吾田の上如きうたけにあつし是れ
武天の御家の御家の御家の御家の御家の
八角の御家の御家の御家の御家の御家の
つさうりありしなり
吾田の御家の御家の御家の御家の御家の
ありし吾田の御家の御家の御家の御家の
ありし吾田の御家の御家の御家の御家の
ありし吾田の御家の御家の御家の御家の
ありし吾田の御家の御家の御家の御家の
ありし吾田の御家の御家の御家の御家の
ありし吾田の御家の御家の御家の御家の
ありし吾田の御家の御家の御家の御家の

